

兵庫教育大 ○菊沢康子 他10名(第1報と同じ)

**目的：**前報と同様であるが、本報では高齢者の夏季における暑さへの対応に焦点を置いて、その着衣、住宅および住み方の実態と温熱感や疲労感との関係を地域別、男女別に検討した。方法は前報で述べた62年度の調査と同様であるが、それ以外に63年度に岩手と兵庫で男女各20名に対する面接聞き取り調査を行った結果も合わせて検討する。

**結果：**高齢者の温熱感には地域による差が顕著に認められないが、着衣の状態、住宅および住まい方対応には地域差が認められた。すなわち昼間家庭での平均着衣量は岩手で男性0.50ク口、女性0.44ク口に対し、兵庫では各々0.32ク口、0.41ク口で兵庫の方が薄着である。住宅、住み方対応では、いずれの地域でも「日差しを防ぐ」が第一に多いが、特に大阪、兵庫で高率を示し、それに続く「す戸」や「よしず」の利用は中部以西、「打ち水」は関西と広島でより多く、住み方工夫の地域差が認められる。また住宅自体に手を加える「断熱材を入れる」は北海道や東北で各々3割、2割位認められたが、他では1割以下である。直接的温熱調節法としては、「窓を開ける」が地方差なく第一に多くあげられたが、「クーラーの利用」は都市部居住者の多かった東京、大阪、兵庫、広島で高率であった。以上のように対象地域の北と南では日常生活における気候への対応には差が認められるが、対象者の多くは生まれたる時から同地域に住み、気候に順応しており、現状の防暑対応を当然のことと受け止めているために温熱感には居住地が変わっても差が表れないのではないかと考えられる。しかし、疲労感には北部より南部の居住者に、しかも農村部より都市部居住者にその訴えが高率である。これらの点を考慮した防暑対応が必要である。